

《翻訳》

ダリット連帯プログラム報告（二）

一九九四—一九九五

目次

序文…バグワン・ダス DSP代表

前置きの報告…ジェイムス・マッセイ DSP名誉幹事・理事

プログラム優先ナンバー・ワン…

さまざまなダリット連帯プログラムの強化とネットワーク化

北西インド （以上前号）

西部インド

中央および北東インド

南部インド（詳細は女性および青年諸報告参照）

プログラム優先ナンバー・ツー…

ダリット共通イデオロギーに関する協議会

プログラム優先ナンバー・スリー…

ダリット・先住民全国協議会報告（以上本号）

桐村彰郎（訳）

プログラム優先ナンバー・フォー…

ドリット問題の国際化

女性プログラム

ドリット女性会議…ラクノウ

指導者訓練キャンプ…チャンガナチエリ

準地域の女性ワークショップ…パンジャブ州シヤプール村

女性会議…プネー

マヒラ・ジャグラン…カラジア

エンパワメント・プログラム

北京女性会議

DSP青年プログラム…年次報告

青年指導者訓練…ピネリ

パラライ村訓練プログラム

全国青年プログラム計画ワークショップ…ナグプール

マンナ・シン・ワラ村セミナー兼村落レベル訓練プログラム

村落レベル自覚化キャンプ…マク

ドリット青年指導者訓練キャンプ…チャンガナチエリ

ドリット連帯指導者およびエンパワメント・プログラム…ナグプール

青年指導者訓練プログラム…ウスコタイ

新たなパラダイムの全国青年幹事会議

世界教会協議会総書記とその一行訪問時における演説の交換

西部インド

今年の西部インド地域は、ダリット連帯プログラムの渦中にあった。そこは、多くの場所でのさまざまな活動の中心になったのである。この地域は、異なった性質の一二のプログラムを首尾よくおこなったが、そのうち七つのプログラムはマハラシュトラ州で、四つのプログラムはグジャラート州で、一つはゴア州でおこなわれた。

マハラシュトラ

- 一、一九九五年三月 八日―九日。カンデシュ準地域のためにナーシク県デオラリで。
- 二、一九九五年五月 八日―九日。マラス―ワダ準地域のためにオーランガバード県エローラで。
- 三、一九九五年七月一五日―一六日。ボンベイ―セイン準地域のためにボンベイ(チェンブール)で。
- 四、一九九五年七月二日―三日。西部マハラシュトラ準地域のためにマハードで。
- 五、一九九五年七月二八日―二九日。プネーで女性会議。

六、

ナグプールで青年会議。

グジャラート

- 一、一九九五年四月一〇日―一日。サウラシュトラ準地域のためにラジコートで。
- 二、一九九五年四月二日―四日。カシアワド準地域のためにジュナガードで。
- 三、一九九五年八月一九日―二〇日。アーメダバード市(都市自治体)の教師のためにアーメダバードで。

ゴア

一九九五年八月二九日―三〇日。南部ゴア準地域のためにバスコ・ダ・ガマで。

プログラムは、どこでも可能なかぎりダリットのテーマとダリットの問題を反映するように、展示、フォークダンス、街頭演劇、村落・スラム訪問、民芸などを二日間のカバーすることが意図された。また、ダリットの女性や青年に公正な代表権を与えつつ、ブディスト、クリスチャン、ムスレム、シクのダリットを含む参加者のために、これらのプログラムを遂行することが決定された。

これらのプログラムの共同召集者は、マグダレーヌ・カンブル師（デオラリ）、N.G.メシラム教授（ボンズ）、Dr.(Ms.) シェッティ・ランジェワール（ナグプール）であった。

州についての詳細は以下のとおり。

A、マハラシュトラ州

一、デオラリ（ナーシク県）

我々のプログラムは、カンデシシュ準地域からはじまった。プログラムはMs.マグダレーヌ・カンブル師が一九九五年三月八日—九日にデオラリで組織した。約三〇名がこのプログラムに参加した。著名な参加者は、(故) Dr.A.P.ニルマル、有名なマラティ文学者のMr.バブラオ・バガル、著名な歌手（そのテーマはダリットの信徒であるDr.ババサヘブ・アンベドガルにもとづいている）のMr.ワマン・カルダク、ナムデオ・ゴドセ同志、Ms.インデラ・アサワル教授、S.N.スリヤワンシ師およびプラディープ・カンブル師であった。プログラムの主要テーマは「ダリットの尊厳と幸福」であった。公式や非公式の会談がおこなわれた。Dr.ババサヘブ・アンベドカルの使命に関わるフォークソングやカウワリが上演された。バスケット作りの伝統的技術が女性の人々によって実演された。ここで注目すべき奇妙なことは、都市エリア、ナーシクのダリットが文字を知らず、非常に後進的（バックワード）なので、彼らは自分たちの国の名を知らないということであった。

ダリットの二つのカテゴリーがこのエリアでは注目された。すなわち、一つは高度に教養があり、政治的、社会的に啓発された人々と、二つめは最も無教育、後進的で、生存水準以下の人々である。政府と政党は後者を最も搾取しているのだ。

プログラムは、Ms.インデラ・アサワル教授や（故）Dr.A.P.ニルマルを含むダリット生まれの著名な地元リーダーが演説するナーシク大衆集会で終わった。

二、エローラ（オーランガバード県）

一九九五年五月八日—九日にプラディープ・カンブル師によって、マラスワーダ準地域のために、エローラ（オーランガバード）でワークショップが組織された。ワークショップは「ダリットのアイデンティティとダリットの福祉」というテーマで組織された。

ワークショップには約二五名の人々が出席した。参加者たちはこの地域にはまだダリットへの搾取があると訴えた。ダリットは職業的には依然としてブラーマンの奴隷である。この地域には奇妙な伝統がある。ダリットはブラーマンの家でおこなわれる結婚式のとき、ブラーマンによって踏みつけられるのである。この伝統的な慣行は、ダリットが奴隷であることのシンボルとして、こゝでなお続けられている。この地域では、ダリットの八〇%が職業的にブラーマンの奴隷なのである。ダリットはマリバ・ダンス(ポトラジ)を演じる。歌が神々の機嫌をとるために歌われる。今やダンスや歌はロ・ババサへ・アンベドカルの栄光のためにもまた演じられている。

参加者は女性、若者、年長者にグループ分けされた。ダリットの青年グループは、教育を欲するにもかかわらず、若いときに仕事を求めざるを得ないことを嘆いた。彼らは、さまざまなダリットの青年たちのあいだに統一をもたらしべく努力できるよう、ダリット連帯プログラムからの手助けの必要があると述べた。彼らは、上層カーストの人々によって抑圧され圧力をかけられている地域のダリットの青年たちへの関心を表明した。彼らはこのひどい状況からの解放を欲している。女性グループは、この種のダリット連帯プログラムに満足を表明し、彼女らの利益を促進する組織が作られることを要求した。ダリットの女性たちは、彼女らの村では飲み水の施設さえも利用できないと訴えた。彼女らの生活は非常に厳しい。彼女らは、上層カーストの邪悪な手に陥らないような生計源をもつために、村落産業や家内産業をはじめめることを望んでいる。女性たちは、さまざまな理由で彼女たちにはひどく疎遠な教育への欲求を表明した。年長者たちは、彼らを教育し向上させるための、その土地の言葉で利用できる文学が十分になり、とくにマラティ語でのキリスト教文学が彼らに入手できない、と訴えた。憲法上の保護条項も、同じく彼らに利用できるものとはなっていない。草の根レベルでのプログラムだけが彼らを助けることができるのである。彼らは自らの改善と向上のために、財政的にもまたその他においても助けを求めて、ダリット連帯プログラムのほうを向いているのである。チャンダーカール師、アヒナス・ドラス教授、(故) Dr. A. P. ニルマル、Mrs. ニルマル、Mr. シャンタラム・パンドレが著名な才知ある人々のなかにいた。

三、チェーンブール

ボンベイ・セイン準地帯のためのワークショップは、Mr. サンジエイ・ベアラルによって一九九五年七月一五日—一六日にボンベイのチェーンブールで組織された。ダリット・ミトラの Mr. Y. M. ガイクワッドがプログラムを開始した。このワークショップは次の

主題を審議した。

- (a) ダリットの青年とその自我像。
- (b) ダリットへの暴力行為と法の諸規定。
- (c) インド社会におけるダリットの女性。
- (d) ダリットの社会経済的問題。
- (e) インドの未来におけるダリット。

このワークショップは、約五〇名の参加者とともに、ボンベイ所在の二つの大学のアカデミシャンを引きつけた。ボンベイ大学とSNDT大学の教授たちである。

ワークショップはダリットの青年と自我像についての討論で始まった。この問題についての議論の口火を切って、ラメシユ・カンプル教授(ボンベイ大学)は、人間はものを創造する能力の故に動物とは異なっている、と指摘した。すなわち、人は人間としてその潜在的力を自由に活用できるのである。彼はさらに、我々がこの国でダリットの社会生活を見るならば、ヒンドゥ主義のもとでダリットは人間であること、人間になることの権利を否定されている、と指摘した。彼らは自由連想の権利を否定され、その結果ゆがめられた自我像を發展させたのである。しかしながら、ダリットの抗議と自己掌握の試みは、彼らが受けとった独自の権利と特権の故に、このゆがめられた自我像を一変させようと試みるものだった。闘争によって彼らはゆがめられた自我像を変えた。教育と雇用という方法の結果として、ダリットの青年たちの自我像は根本的に変化した。しかしまた、それは、いま我々が持っているように、社会に貢献することの可能な有能なダリットの青年たちを獲得したのである。しかし彼らのあるものはあまり発展のない仲間に対して無責任な展望を展開した。だから現在の社会生活においては、我々は矛盾した、自我空想的なダリットの青年たちを持っているのである。

ガウタム・ガワリ教授(ボンベイ大学)は、人間的自我の構築メカニズムを説明した。彼は、さまざまな方法で、ダリットの自我像がまさに子供のときからダメージを受けているということを指摘した。ダリットの子供の心のなかにある否定的な自我像を伝えることによって、ダリットの子供の自我像形成に際して果たす教師の役割について彼は論じた。自我はまた、家庭において最も

厳しい形でダメージを受けうる。こうして自我像を家庭および学校の両方で改善することが必要なのだ。ガウタム・ガワリ教授は、この積極的自我像構築のさまざまな局面を説明し、かつ、これは自我の確信を打ち立て、また未来においてコミュニティ志向的なダリットの青年たちを鍛えあげるものだと述べた。

マ、C、ワーケ教授(ボンベイ大学、法学部)は、ダリットへの暴力行為に対し、正義を確立するさまざまな法規定について詳細に述べた。彼は暴力行為の犠牲になった人々を支援する法的援助センターのさまざまな仕組みを説明した。この会議では参加者は暴力行為および他の形態の不正に関する経験を共有した。

第三の会議は「インドにおけるダリットの女性の諸問題」にあてられた。Ms.ヤシューグラ・Y・ガイクワッドはこの問題を検討して、ダリットの女性は男性支配のインド社会の故に、第二義的存在という犠牲者になっていると指摘した。ダリットの女性は、二重に奴隷化されている。彼女はさらに、ダリットの女性と教育、自立的職業の選択、家族や社会において決定作成に加わる権利といった諸問題について論じた。

Mrs.サニタ・チャバンは、他のダリットの女性と同様に、自分が子供の時にさえも弟や妹の世話をしなければならなかった、と述べた。彼女は、こうした責任とともに成長したと言い、今やこの責任は終わったのだから、ダリット・コミュニティに変化をもたらすため、コミュニティの福祉のために自身が貢献しなければならない、と述べた。

ダリットの社会経済的状態について論議しつつ、プラディープ・カンブル教授は、この国におけるダリットの社会経済生活に対する新経済政策のインパクトを説明した。彼はさらに、私有化の過程が拡大するにつれて、リザーベーション政策の範囲は縮小するであろう、と述べた。この結果として、ダリットは自己開発の手段を失うであろう。こうして彼は、私的セクターにおいてもまたリザーベーションをおこなうことに賛成するむね論じた。

インゴール教授(D.アンベドカル大学)もまた、ダリットの社会経済的問題について、簡潔な演説をおこなった。

第五の会議は、「インドの未来に向かって前進するダリット」と題して、ラメシュ・カンブル教授によりおこなわれた。我々はすでに、新たな経済政策とライフスタイルに入りこんでいると彼は指摘した。彼は述べた。私有化政策はなるほどリザーベーションの範囲を制限するだろうから、ダリットの発展には不利である。しかし、私有化の下でも、リザーベーション政策は組織セクターにの

み限定されるであろうから、リザーベーション問題は、いかに重要であろうと、依然として限定的なものなのだ、と彼は指摘した。組織セクターで働いているダリットは一〇%から二〇%にすぎない。インドでダリットのために機会を広げること、未組織のダリット労働力として働いている八〇%のダリットに留意することを意味するのである。さらに彼は、未組織セクターの労働力の八〇%はダリットからなっている、と述べた。

こうして、ダリットの未来について語ることは、未組織セクターの八〇%のダリットの問題を論じることを意味するであろう。ガウタム・ガワリ教授は、ダリットの未来は、その若き世代すなわち子供たちのなかにある、と強調した。彼らは、子供たちを明日のための投資と見るべきである。もしこれら子供たちが適切な教育と訓練を与えられるならば、彼らはこの国においてすばらしい未来をもつてであろう。

特別な提言に到達するよう企画された終わりの会議において、Mr. プレム・マシと N. G. メシラム教授は彼らの見解を寄せた。Mr. プレム・マシは、制度的ネットワークへの現実的で具体的な努力を強調した。もしダリットが断固とした統一的な仕方で活動するならば、彼らはこの国で権力に到達することさえできるのだ、と彼は指摘した。N. G. メシラム教授はこの会議でいくつかの価値ある提言をした。

すべての才知ある人々や参加者たちは、ダリットがまさに学校へ行く年代からやる気をくじかれ抑圧され、心理的に意気消沈させられている、という結論に到達した。この国ではダリットのための学習や教育のよき環境がない。学校やより高度の学習施設における上層カーストの教師は、ダリットの学生に教育の中断を余儀なくさせるような不都合な雰囲気を作り出している。その結果、ドロップアウトする率はダリット間には非常に高い。

BMC 学校の校長の Ms. ヤシュデーラ・ガイクワッド、Ms. サニタ・チャバン、Ms. ソナウェイ、Mr. プレム・マシはゲストスピーカーで、参加者に演説をした。

四、マハード

ダリット連帯プログラムの西部マハラシュトラ準地域会議は、Mr. シェラーおよび Mr. ヘマント・タヤドによってマハードで組織された。マハードはダリットの解放にとって歴史的な場所である。ババサハブ・アンベドカルが、水槽から水を飲むという自然

権を行使すべく、ウォーター・アジテーションを開始したのはここからである。一九二〇年代や三〇年代には、グリットは水槽を利用できなかったのである。この会議は、一九九五年七月二日—三日に組織された。約七〇名の参加者が出席した。会議は、主唱者のマハード市(都市自治体)のサダカール・サワント長官によって開始された。開始前に参加者は全員ウォータータンク・アジテーションの場所について、D.J. ババサヘブ・アンベドカルの像に敬意を表した。開会の辞で、M. サワントは、チャオダール・タンクの水は牛には認められなければならない人間には否定されていたことを認めた。D.J. ババサヘブ・アンベドカルは、グリットへの人権を否定する慣行としてそれを象徴化すべく、アジテーションを開始したのである。シブ・セナーBJPのマハラシュトラ政府は、ムスレムに対する人権をまさに否定するために、州のマイノリティー委員会を解散した。このタイプの慣行はここでは永久化されている。彼はさらに言った。D.J. ババサヘブは、ブラーマン集団それ自体に怒ったのではなく、人々のブラーマン的態度が人間性に反するが故にそれに怒ったのである、と。D.J. アンベドカルは人間性に反するこれらすべての態度に反対した。彼は人間社会全体はひとつの同質的社会であるべきだ、との見解を持っていた。彼の目的はカーストの絶滅であった。M. サワントはフディスト・グリットの窮状はまだ改善していないことを認めた。彼らは何世紀も前からのものであり、有名な建築家コンサルタントのM. ジャヤント・タイプニスと言った。グリットは限界を越えずと寛容であった。グリット以外のもの(ノン・グリット)もまた暴力行為の標的であるが、彼らは寛容ではない。グリットは暴力行為にも不正にも寛容なのである。それゆえ彼らは、より多くの犯罪とより多くの暴力行為を受けやすいのである。彼らはもはやそうすべきではない。

それに続いて、「グリットの諸問題とマハラシュトラ政府」という論題について討論がおこなわれた。前代議士のM. R. D. バワールが主宰した。M. アマル・タイプニスが問題に照明をあて救済策を示唆した。ムスレムの参加者、著名な映画・テレビ俳優のM. サムステイン・バイ・マニアルが討論に参加して言った。「我々はすべてグリットである。我々は政府によって与えられた施設だけに依存すべきではない。我々は自分自身の向上のために努力すべきである」。女性組織の議長、Ms. アルカ・カンブルは、この地域におけるグリットの女性に対する犯罪を訴えた。彼女はこの地域でのグリットの女性の従属状態についていくつかの問題をあげ、法律は彼女らを守るのに十分ではないと訴えた。サタラ県からの数名の出席者も討議に参加し、彼らのコミュニティの問題を提示した。

一九九五年七月二三日、参加者は、女性、青年、年長者という三つのグループに分けられた。Ms. ミーナクシ・ムーンが女性グループを主宰し、ダリットの女性のテーマ、問題と方策について討議した。青年グループは、Mr. グナジ・カシルデカルによって主宰された。このグループは、ダリットの青年の動機づけと参加の必要性を強調したが、ダリットの何らかの主要な運動が首尾よく開始されるかどうかは、その参加次第なのである。彼らは社会的、教育的、政治的に現存する局地的、地域的レベルでの若干の問題を議題に載せ、そして人権執行の必要性を強調した。Mr. サムスティンは、年長者グループの席で発言して、参加者たちがその闘争においてムスレムのダリットをも助けるように要請した。彼は今日インドに存在する社会的、政治的、あるいはその他の環境は、インドの分裂にいたった一九四六—四七年ほどよいものではないと述べた。上層カーストは、国のすべての人々の統一のために健全な雰囲気を作り出していない。この状況はわが国を二〇〇〇年後方に連れ戻すだろう。このグループは、Dr. アンベドカルの著作についての指導の必要性和、さまざまな宗教のダリットの統一の必要性を強調した。

終わりの会合で、三グループすべてのレポートが、著名なダリットの女性活動家で作家の Ms. ウルミラ・パワール議長に提出された。ダリットの女性活動家でジャーナリストの Ms. ミーナクシ・ムーン、副校長でムスレムのダリット活動家の Ms. シャイク・ヌールジャン・アブダル・ジャミル、Dr. キシヨル・シャンタバイ・ケイル、それに Mr. S. N. シェラーが参加者に演説をおこなった。

この準地域では、Dr. ババサヘブ・アンベドカルの旧友たち幾人かと出会う機会があった。彼らは、ダリット解放のための運動において、彼とともに活動する機会をもったのである。

五、ブネー

ダリット女性会議は、一九九五年七月二八日—二九日に、Ms. マグダレーヌ・カンブル師によってブネーで組織された。Ms. シャシ・ミンズが開会式をおこなった。Mr. バグワン・ダスがチーフゲストであった。

六、ナグプール

Mr. A. ラメイアと Dr. K. M. カンブルによって、二つのプログラムが青年のために組織された。これらのプログラムのレポートもまた召集者によって別々に提出されている。これらのプログラムには、Mr. バグワン・ダス、Dr. ジェームズ・マッセイ師が出席

した（詳しいレポートについては青年プログラムを見よ）。

B、グジャラート州

一、ラジコート

グジャラートで最初のプログラムはラジコートで組織された。これはグジャラートで最初の草の根レベルのプログラムであった。それは、アナガリック・タマバンド、別名パガル・ババという周知のソーシヤル・ワーカーによって組織された。ラジコートはグジャラート州のサウラシュトラ準地域にある。プログラムは一九九五年四月一〇日—一日に組織された。四月一〇日には、D. バサヘブ・アンベドカルや他のダリット指導者たちの栄光の歌が上演された。D. バサヘブ・アンベドカルの肖像写真の展示会が二日にわたって用意された。地元の著名なダリット指導者たちが演説し、この地域のさまざまなダリット問題に照明をあてた。グジャラートの著名なクリスチャンのダリット作家、D. ジョセフ・マクワンがプログラムに出席した。彼はD. バサヘブ・アンベドカルがダリットに尽くした奉仕活動について人々を啓発した。D. ジェームズ・マッセイがこのプログラムに特に出席して、大衆集会で演説した。会合に出席した参加者も地元の人々も、男も女も、D. マッセイ師を熱心に待ちうけてその話を聞いた。大衆はさまざまな宗教的背景を持つダリット間の新しい連帯理念について、D. マッセイから学ぶのに非常に熱心だった。参加者のなかにはD. バサヘブ・アンベドカル旧友が少しはいたが、彼らはダリット連帯プログラムというこの新しい企てに喜び満足感を表明した。彼らは今後の諸協議に協力することを望んだ。

二、ジュナガード

それに続いて、グジャラート州のカシアワド準地域の主要都市ジュナガードで会議がおこなわれた。会議は一九九五年四月一二日—一三日にMr. ハリシュ・ラワリアによって組織された。D. ジェームズ・マッセイ師が会議を開始した。開会の辞で彼は「インドにおけるダリットの現状と諸問題」について詳細に語った。彼は、インド政府がダリットという言葉のなかに、ヒンドウやブデリストやシク出自のダリットの人々を受け入れ、含めていることを明らかにした。キリスト教やイスラムや他の宗教に属するダリットは、インド政府によってダリットとみなされていない。しかしキリスト教やイスラムの信仰に従うダリットが他のダリット・

コミュニティの人々と同じ差別的取り扱いを受けているのは事実である。政府は隠れた動機を持っている。もしダリットの数が増えて彼らが団結すれば、彼らは潜在的な力となるだろう。D.マッセイはインド政府が宗教の名においてダリット・コミュニティを分割してきたと主張した。実際問題として、今日インドでは全体としてダリット・コミュニティは、一九九一年の国勢調査によれば、約二五%である。さらに彼は、ザッファワル（パンジャブ州）とジャリ（オリッサ州）の二つのケースに照明をあてて、ダリットは実際インドの土着の人々のなかで最も初期の移住者の一つである、と述べた。彼は、インドでは基本的人権がダリットには否定されていることに参加者たちの注意を促した。そして、ノン・ダリットがダリットに犯すさまざまなタイプの暴力行為や犯罪のケースの統計を引用した。彼は宗教的な庇護とはかわりがないダリットの統一と連帯の必要性を強調した。

他の著名な参加者もまたこれを機に語った。Mrs. マクワナは、ダリットの女性が台所から出てきて、ダリットの男性とともに、その権利のために闘うようアドバイスした。Mr. V. T. メワラルはダリットに加えられる犯罪に対する苦しみを表明した。ナグプールからきた全国活動委員会のメンバー、Ms. S. S. ワグメア教授もまたこの会議に出席し参加者に演説した。

カビーサメランをともなつた第一目のプログラムは、著名なクジャラートの作家であるD. J. ジョセフ・マクワンの議長のもとでおこなわれた。一〇人の新進のダリット詩人たちがダリットのテーマにもとづき、D. P. ババサヘブ・アンベドカルの使命に関する彼らの詩を上演した。カビーサメランは三〇〇〇人収容できるホールでおこなわれた。ホールは満員だった。

一九九五年四月一三日に、参加者はグループ討論のために四つのグループ、女性、子供、青年、年長者に分かれた。このように技術的に分けられた参加者は彼らの見解を提示するよう動機づけられ励まされた。討論の要約は以下のとおりである。

- (a) 不正な社会的伝統を排除せよ。
- (b) 宗教的迷信を根絶せよ。
- (c) ダリット間に教育を奨励せよ。
- (d) D. B. R. アンベドカルの使命を拡大するために、県レベルの伝導団を設立せよ。
- (e) ダリット間に連帯をもたらせ。またそのための有給の労働力を創り出せ。
- (f) 女性のグループを組織せよ。また彼女らに仕事の機会を与えよ。

- (g) ダリットへの暴力行為に対して、闘うために、ダリットの弁護士たちの一団を創り出せ。
- (h) 学校卒業証明書のような文書に、カーストを記録することを廃止するよう勧告し、別個にカースト証明書の発行を導入せよ。
- (i) 女性は、その欲求の表明を認められ、かつ、男性とともに決定過程に参加すべきである。

ダリットの女性たちは、ダリット間に自覚を創り出すため、独自の女性プログラムへの欲求を表明した。

第二日目のプログラムは、教育的文化的プログラム、すなわち迷信と無分別な信仰に関する教育をともなっていた。それはMr. ヒマバイ・ラワリアの議長のもとに組織され、多くの聴衆が出席した。翌日は、Dr. ババサヘブ・アンベドカルの誕生記念日であった。巨大な集会がカシアワドの小さな町、ケシヨドで組織され、ジュナガードでは行列がハイウェイにくりだして、Dr. ババサヘブ・アンベドカルへの尊敬と感謝の念を表明し、彼に敬意を表した。ダリットの女性は老いも若きも文化的プログラムをおこない、ガリバトと呼ばれる伝統的ダンスが五〇〇〇人の大衆の前で演じられた。

三、アーメダバード

アーメダバード市(都市自治体)で働く教師の協議会が、一九九五年八月一九日—二〇日にDr. デブン・テサイにより組織された。Mr. バグワン・ダス、Dr. ジェームズ・マッセイ師そしてN.C. メシラム教授がこの折の名誉ゲストであった。このプログラムのレポートは召集者が別に提出している。

C、ゴア州

バスコ・ダ・ガマ

ダリット連帯プログラムは、ゴア州では一九九五年八月二九日—三〇日にバスコ・ダ・ガマでおこなわれたワークショップとして始められた。Mr. D.L. パセカルが組織した。ワークショップはゴア政府のパワー省大臣閣下、Mr. マウビン・ゴディノによって開始された。プログラムは、Ms. アンジェラ・マスカレナス、Ms. ジュリエラ・ディアス、Ms. ピンキーのバスコ・ダリット・ガールの演じる歓迎の歌とともに始まった。歌は伝統的なコンカニ語の土地言葉で美しく歌われた。歌の原文は以下の通りである。

(略)

英語での歌の意味は次の通り。

(略)

Dr. ジェームズ・マッセイ師は基調演説をおこなって DSP の目的、目標を明らかにし、パンジャブとオリッサの村々のケーススタディを提示した。

ワークショップの開会式にあたって、Mr. マウゴン・ゴディノ閣下は、DSP を祝福し、Dr. ババサヘブ・アンベドカルのインド人の統一についてのメッセージを強調した。Mr. ゴディノはダリットの統一について強調した。

ワークショップには約一二五名の参加者がゴアのさまざまな地域から出席した。二つの街頭演劇すなわちパントとジャイビームが R.K. テラング、D.L. パセカル、Ms. アンジェラ、Ms. スウェータ、V.B. ガワウエイド、R.S. ボンスルそしてキシワードによってその折に上演され、作および監督はバスコ・ダ・ガマのケンドリア・ビディアラヤのダリット教師、R.M. テラングであった。

「パント」は、タミール・ナドゥ州サレムメトゥール村でのダリットの女子小学生ダナムに対する暴力行為についての目撃証人の説明にもとづいた街頭演劇のテーマであった。これは非常に悲惨な事件であった。

ダナムというのどの渴いたダリットの少女が、学校にいるとき水を飲みに行く。しかし彼女の飲む水は、上層カーストの学生に予定されていた。クラス教師は、ダナムがその水を飲んでるのを見て怒る。彼は彼女を無慈悲にたたき、彼女の目を傷つける。視力の喪失を恐れて、学校長や他の役員は事件を隠そうとする。のちに、あるダリット・レポーターがこの事例を暴露し、この暴力行為が、この国では、導師ドロナチャリヤがダリットの学生—エクラビヤに対する差別をおこなったマハラット時代から、永続化されてきたことを申し立てる。この差別的永続化は、ダリットの連帯を真剣に考えることを必要とする。

上演されたもう一つの街頭演劇は「ジャイビーム」というものであった。この演劇のストーリーは、Dr. アンベドカルの像に対する罰当たりな行為にもとづいている。Dr. B.R. アンベドカル像の片手が、上層カーストの悪漢たちによって壊された。このニユースは野火のようにダリットの居住地に広がる。ダリットたちは怒り狂う。彼らのひとり、この事件についての新聞を読んで、耐えきれなくなる。怒り狂って彼は抗議に出かける。しかし彼は、悪漢たちに打ちのめされ、警察は上層カーストと結びついている。彼らはまた、彼の娘を打ちのめし、彼の妻を殺し、彼らのやり方を押し通す。彼が戻ってくると、彼の妻は死に、娘は誘拐さ

れている。彼の悲しみは増し、彼はインドのこの差別的社會構造を厳しく批判する。彼は、誇りや威厳の象徴であり、差別的社會構造を破壊するダイナマイトであり、そして、すべての不正と抑圧に反対する声であるジャイビーム(アンベドカル万歳)という言葉を発してその生を終える。

八月二十九日の午後の会議で、参加者たちは「ダリットの先史時代とその証明」というテーマで審議した。Dr. ジェームズ・マッセイ師は、テーマについて詳細に述べ、参加者たちにDr. アンベドカルの「アンタツチャブル」を読むよう助言した。彼はDr. アンベドカルの著作は、この分野での先駆的な研究だと言った。現在の世代は、ダリットの向上のために一所懸命働かなければならない。彼自身の「ルーツ」に言及しつつ、彼は、ダリットがどのように中央アジアからやってきたアーリア人に支配され、苦しめられているかを論じた。アーリア人は、インドの住民を犯罪的な部族の地位におとしめ、彼らを辺鄙な場所に逃亡せしめた。彼はまた、ダリットはハラッパやモヘンジョダロの文明、文化と関係をもっていると主張した。

一九九五年八月三〇日に、参加者たちは、朝の会議で「ダリットに対する暴力行為と法規定」というテーマで審議した。N. G. メシラム教授は、不可触賤民制の公的廃止についてのインド憲法第一七条に言及したが、実際にはインド社會において、それは多く現存しているのである。今日でさえも、ダリットはいくつかのインドの村々では、上層カーストの保存する水に触れることを許されていない。一九五五年のPCR法(市民権保護法)の諸規定、および指定カースト・指定部族の保護を意図した一九八九年のSC・ST法の暴力行為阻止規定に言及しつつ、彼は、ダリットへの暴力行為を考慮に入れ、またこの趣旨でのFIR(警察への第一報)に対して行動しない警官たちの処罰のために、州レベルで利用できる法や独自のPCR支部の規定について、詳細な解釈をおこなった。

午後の会議は、「リザーベーション政策とダリットの社會經濟問題」のテーマで、A. ラメシア教授によって主宰された。ラメシア教授は、インドの社會構造のなかで広くおこなわれている二つの型のリザーベーション、すなわち書かれたリザーベーションと書かれないリザーベーションがあることを明らかにした。彼は、現在のところ書かれないリザーベーションがブラーマン的社會秩序の下では、より効果をもっていると報告した。寺院への立ち入りと寺院僧侶の地位は、ほとんど知識を持たないにもかかわらず、例外なくブラーマンのためにリザーブされている。ダリット・コミュニティのIAS(インド行政職)の官僚は、同僚によって差別されてい

る。彼は、いかなる分野での成功も、次の三つの理由により、ダリットにはもたらされないと言った。保護、政治的権利そして雇用教育の否認がそれである。

これに続いて行動計画会議がおこなわれた。いくつかの提言がなされたが、そのうち重要なものは次の通り。

- ① 県や村落レベルでダリットを動員し村落キャンプを組織せよ。
- ② 全国的指導者層と草の根の指導者層との間に環を作り出し、各村落に代表者を置け。
- ③ ダリットに関する調査プログラムを企画せよ。
- ④ ムスレムやヒンドゥやシクやクリスチャンやブディストのなかでダリットであることの確認作業を一層進めよ、彼らを保護できるように。確認のために何らかの明白なマークがあるようにせよ。
- ⑤ このプログラムに、読み書きのできるダリットとできないダリットをともに含めていくこと。
- ⑥ DSPを政治に近づけるな。
- ⑦ DSPのプログラムのなかに女性を包含することは一層重要なことである。
- ⑧ ダリットに対して犯された暴力行為を認識し、その排除のために働き、彼らが正義を得るように努めよ。
- ⑨ すべてのレベルでのダリットのコミュニケーションのためのメディアが創られるべきである。
- ⑩ 指定部族やOBC（その他の後進諸階級）と提携せよ。
- ⑪ ダリット・コミュニティの間に存在するカースト的偏見感情を取りのぞけ。
- ⑫ 個人的な獲得物のためではなく、全体としてのダリット・コミュニティの福祉と保護のために働け。
- ⑬ 女性には、家庭から出ることが奨励され、教育され読み書きの出来るように援助されるべきであり、彼女らの主張は支持されるべきである。
- ⑭ さまざまな宗教のダリットの徹底的なスケジュールを準備せよ。
- ⑮ 偉大なダリット指導者たちの生涯の概略を学校のカリキュラムのなかに入れるよう勧告せよ。
- ⑯ ゴアへの移住者は、一五年という住まいの条件がなくても、職業安定所での登録を推薦されるべきである。リザーベーション

の予備をいっばいすること。

⑩ Dr. ババサヘブ・アンベドカルの著作やDSPの刊行物入手できるようにせよ。

⑪ 少なくとも一年に一度はDSPのワークショップを持ち、ダリットの大義に対する政府機構の活動のなさについて情報を収集せよ。

ワークショップは、お別れの会議で終わった。この会議では、Mrs. アンジェラ・マスカレナスが主宰した。北ゴアの Mr. サダカル・ダガオカルと南ゴアの Mrs. S. S. サルヒが、満場一致で、ゴアにおける以後のプログラムの召集者役に出選された。

Mrs. マスカレナスは二日間にわたるプログラムに満足の意を表明し、ダリットのリーダー達の指導の下で、ダリットは動機づけられ、かつ、利益をうけるであろうとつけ加えた。最後に、Mr. D. L. パセカルは、積極的な参加でプログラムに大成功をもたらしたことにつき、全員に対して協力に感謝の念を表明した。

中央および北東インド

中央および北東インド地域は、ウツタル・プラデシユ (UP)、マディヤ・プラデシユ (MP)、ビハール、西ベンガル、アッサム、メガラヤ、ナガランド、マニプル、アルナチャル・プラデシユ、トリプラそしてミゾラムの諸州からなる。ダリットと部族は、あわせてこれらの州に住む人々の大多数を構成するであろう。これらのグループは、ともに抑圧され虐げられた人々であるが、悲しくも両者はお互いに疎遠であった。何かを内容あるものとして成し遂げるには、多くの基礎作業が必要であるが、しかし始まりはなされた。

ダリット・先住民共同プログラム

ダリットと先住民との全国協議会は、一九九五年三月二八日—三二日、ジャルカンド (ビハール州) のランチーでおこなわれた。テーマは、「ダリットと先住民…出会いの場」であった。

これは、ジャルカンドの搾取され、収奪され、貧しいものの中で最も貧しい先住民—サンタル人、オラオン人、ムンダ人、ホー

人とダリットとが一緒になり、その統一的努力を示した初めてのことであった。我々はひとつの人民である。もう搾取はごめんだ。我々の土地を立退け。森林破壊をやめよ。我々の水資源からダムを取りのぞけ。

以前は、南ビハールのこの高原地域は、さまざまな部族の区画に分割され、南ビハールのチョータナグプル地域に住む七〇の多数の部族の間に分割されることにより、北ビハールの非部族といわれる上層カーストによって、彼らは搾取され従属させられていた。しかし今や、一九九五年八月一九日のジャルカンド地域自治評議会（J A A C）の生誕は、部族たちにとって心理的なブーストになっている。それは、彼らの成長する政治的意識と、地域の行政への意義ある参加にとつてよき前兆を示すものである。その成功は、連邦構造内部での権力の分有に取り組んできた数十年にわたる不断的努力の結果として出てきたものだから、それだけですすめすめ持ちのよいものであるべきなのだ。

長期にわたるアーディワシー（先住民）の闘いは五〇年に及んだ。闘いは生存のための闘い、特に「ディク」（他者^{よそも}）に対する彼らの小作地権の掌握のための闘いによって引き金が引かれた。順を追って、この努力は、社会経済的な発展のための闘いへと拡大した。

Dr. ミハズ主教、Dr. ラムタル・ムンダ、Dr. (Mrs.) インドゥ・ダン、ローマカトリック教会大司教、C N I（北インド教会）監督テロム、その他著名な地域指導者達がこの協議会に参加した。

フォロウアップのために合同行動評議会が形成され、「統一は力である」と宣言した。この歴史的出来事の詳しい報告は、この報告の一六七―一七三ページにある。

ダリットのマヒラ・ジャグラン・ワークショップ、於カラジヤ

ダリットのマヒラ・ジャグラン・ワークショップは、マディヤ・プラデシュ州の内陸の部族地域で組織された。ワークショップは、地元の召集者、Ms. アニー・ボロが組織した。多数のサトウナム人の読み書きの出来ない少女や女性の参加は士気を鼓舞するものであった。彼女らは、その受難について語っただけでなく、また、搾取や差別に対して抗議した。ダリット連帯プログラムは、彼女らに「声」を与えたのである。

ワークショップは、MPのカラジャで一九九五年八月一日に組織された。参加者のうち三〇人が女性で、一〇人が男性であった。我々は、これらの参加者たちは社会・文化的ニーズを持っていると感じた。DSPは、サトゥナム人ダリットをその憲法的、政治的、法的権利について教育するよう、自覚化プログラムを企画すべきである。これらのサトゥナム人ダリットの女性は、社会的経済的に搾取されている。彼女らは、彼女らに否定されている平等な賃金と適切な保健施設を要求した。

第三のプログラムはある著名な部族のリーダーを歓迎することであった。DSPは熱望と喜びと成功のうちに部族の人々との連帯を示した。DSPは部族の文化プログラムと地元のサトゥナム人ダリットとの協議会を組織した。ピラスプルのグルー・ガシダス大学の副学長は、DSPの自覚化プログラムに非常に感銘を受けたので、彼は我々を彼の大学に招いてサトゥナム人ダリットの社会・文化的遺産に関するセミナーを準備した。

このプログラムには五〇〇人以上の人々が出席した。女性が男性を上回った。

中央議会の一員、M.H.アジト・ジョギは、彼自身部族のサトゥナム人であるが、彼がこの最初のDSPの開会式をおこなった。彼は特にこのプログラムのためにデリーからやってきたのであった。

協議会是一九九五年八月一二日におこなわれた。

西ベンガル州におけるプログラム

DSP西ベンガルは一九九五年に以下のプログラムを組織した。

① ダリット・ジバン・ラサダラ・サンガティ・サンGRAM

一九九五年三月二六日、カルカッタのアストシユ一〇〇周年記念ホール（インド博物館）

② ダリット協議会キャンプ

一九九五年七月一六日および一七日、カルカッタのウドウヤニおよびムスレム・インスティテュート
当プログラムの若干の局面が報告される。

一、ダリット・ジバン・ラサダラは、我々の地域の先住民の民俗芸術家の文化的会合であった。彼らは西ベンガルのさまざまな地域からやってきた。約二五〇人が参加し、そのうち一七六人が署名した。少なくとも三〇人の芸術家が、我が州のさまざまな地域からやってきた。県ごとの参加者は次の通り。ボルドマンⅢ三五、カルカッタⅦ七〇、フクリⅤ五、ハオラⅣ四、メディニプルⅥ六、ムルシダバードⅠ一、ノディアⅡ一二、二四―ボルガナ(北)Ⅲ三六、二四―ボルガナ(南)Ⅱ二五。

上述の一〇の県は、主にプログラムを通じて我々のメッセージを受け取った。

少なくとも九つの異なった民俗的表現形式が、このダリットの聴衆の前で演じられた。

① ツス・ソング…これはパウリとバグテイのなかで一般的である重要な民俗的表現形式である。これら二つのコミュニティは、数において非常に大きく、西ベンガルの西の部分に住んでいる。

② バドウ・ソング…これはブルリヤ県のダリット・コミュニティ内で一般的である重要な民俗的表現形式である。

③ サンタリ・ソング…サンタル人コミュニティは、西ベンガルで唯一最大の部族すなわち先住民であると言われている。

④ オラオン・ダンス…これは南ベンガルの農業労働者が演ずるコミュニティ・ダンスである。

⑤ バティアリ・ソング…これは東部地域からやってきたダリット間で最も一般的な民俗音楽である。それゆえベンガルの難民ダリット住民たちがとてもよく口ずさみあうものである。

⑥ ジュムール・ダンスと音楽…これは西ベンガルの一般的な民俗的表現形式であり、その作曲はほとんどダリットの女性たちがおこなったものである。

⑦ ダリット・ソング…これは運動にかかわるダリット・コミュニティの内部で一般的な新しい音楽の表現形式である。

⑧ ダリットの街頭劇…これは、しばしばさまざまな場所で街頭演劇を演ずる「チャトウルタ・ムク」という一行の制作であった。かれらにはこれまでで最初のステージ上演であった。

⑨ ナティヤ・ダンス…これは一行がブルリア県の辺鄙な村からやってきたたまものである。この一行はその地域のハリ・コミュニティで構成されている。それは我々の黄金の過去の英雄伝説を証明するものである。ダリットの諸コミュニティは、以前はブルリア県以外のどこでも決して演じられたことのないこのすばらしいダンスをつうじて鼓舞されるであろう。

このプログラム、タリット・ジバン・ラサダラは大成功であった。この接触をつうじて我々はいまや、西ベンガルにおけるタリットの状況に焦点を合わせた、同じ目的をめざす文化運動をもつ位置にある。昨年の全国活動委員会の会合前のコメントにおいて、ボブ・スコット師は、我々に、たとえば民俗劇や他の視聴覚的方法のようななんらかの文化的活動を導入するよう要請したが、これは、それを通じて、その多くがいままでさえ読んだり書いたりできない兄弟姉妹が自覚化されうるのである。西ベンガルDSPは、最も必要とされるもうひとつのコミュニケーション・システムを構築しようとしているのである。

二、タリット協議会キャンプは、一九九五年七月一六日および七月一七日にカルカッタのウドウヤニとムスレム・インスティテュートでそれぞれ開かれ、さまざまな職業の男女の先進的なタリット活動家にとつての模範を示した。

① これはさまざまな信仰(ヒンドウ、ブディスト、ムスレム、クリスチャン)出身の指導者たちが彼らのコミュニティをタリットとみなして一緒になった最初のときである。社会的に階層化されたグループとしてのタリットは、ゆっくりとしかし着実に目標にむかつて進んでいる。「タリット」という言葉が、西ベンガルのいずれの宗教コミュニティによつても皆使用されたのは初めてのことである。彼らは、信仰にかかわりなく独自の存在であることを意識させられてきた。カルカッタで有名な「スコットランド教会大学校」の教師Mr.ハロッド・マリック、西ベンガル農村地域のタリットのムスレムの重要な指導者ナシル・アーメド、そしてブディストのスリ・ブツダブリア・ピクシュが聴衆に語った。

② このプログラムでは、さまざまな地域からのタリットの女性がやってきて、DSPの演壇から声をあげた。タリットの女性にはさまざまな地位とカースト・グループに属していた。コディネーターのMs.クリシュナ・バスレイは銀行員であり、Ms.サンビッティ・ポダールは活動家兼タリット文化の演技者であり、Ms.アミタ・モンダルは歴史学の大学院生である。これは、西ベンガルの女性たちが、特にヒンズーとムスレムの宗教的慣行の、そして一般にはほとんどすべての宗教の副産物であるカースト・システムと男性支配の心理的束縛に対して声をあげた最初のことである。

彼女らは、社会における、職場における、そして家庭における男女関係について語った。彼女らはさまざまなかたちで自分たちに与えられている悪待遇に対して抗議した。女性であるがゆえに彼女らは、悪待遇をうけ、タリットであるがゆえになおさらひど

い待遇をうけているのだ。この文脈において、西ベンガルのダリット・コミュニティ内の女性の人々は期待すべき新しい地平線をもっているのである。

女性の状況に焦点をあてたDSPの会議についての若干の統計的説明は以下の通りである。

参加者のやってきた県

- ① 二四ボルガナ(北)
- ② 二四ボルガナ(南)
- ③ ノディア
- ④ ハオラ
- ⑤ フグリ
- ⑥ ボルドマン
- ⑦ ムルシダバード
- ⑧ メディニプル
- ⑨ カルカッタ
- ⑩ コチュ・ビハル

年令グループ

- 四〇以上 …… 七
- 三〇～四〇 …… 三
- 二〇～三〇 …… 三二

計 四一※

※これらの参加者は、我々の記録簿に名前を登録した。その他の参加者もあったかもしれない。さまざまな地域からの若きダリットの女性がやってきてプログラムに参加した。

こうしてDSPは、今や西ベンガルで急速に成長する社会的組織であり、そしてそれがダリットをさまざまな宗教的環境から引き離し、彼らをカースト・システムや社会階層のごとき他のいかなるカーストにも反対する運動のなかで結びつけることに、私は疑いをもっていない。

南部インド（詳細は女性および青年諸報告参照）

プログラム優先ナンバー・ツー

ダリット共通イデオロギーに関する協議会

共通のダリット・イデオロギーに関する共同協議会は、一九九五年九月六日―八日にバタラ（パンジャブ州）で開かれた。参加者は徹底的に討論して、行動の基盤として役立ち、かつ、平等と寛容と正義にもとづく社会を再建するために共通のダリット・イデオロギーが明らかに必要であることを確認した。

ダリット・イデオロギーは、とりわけ、ダリットの歴史や宗教や文化に関連するさまざまな要素を重要な源泉として組み入れるであろう。これらの要素はブラーマン的なヒンドゥの宗教的伝統によって混淆され墮落しているけれども、これらの要素を回復しようとする我々の最近の試みのいくつかはきわめて前途有望なものである。多くの人々がダリットの解放と進歩に対し貢献したが、指導者でかつ憲法作成者としてのロ・アナンベドカルの役割は卓越したものである。

ダリット・イデオロギーは、独自のアイデンティティや文化や言語を維持することのできてきた先住部族とともに、先住民としての位置をもつダリットの過去の歴史にもとづき、かつそれを反映するものであろう。抑圧コミュニティが、ダリットの教育への権利や闘争や政治権力や財産や経済的権利を抹殺し、そして奴隷根性と劣等感を教えこんだ時に、彼らによって取り去られたダリットのアイデンティティは、回復されかつ光をあてられなければならないのである。

イデオロギーは、ダリットの展望から展開されねばならないし、このために、ダリットは歴史の主体、その通訳とならねばなら

ない。ダリット・イデオロギーは、抗議の基本的推進力をもたねばならず、真の敵を見分けなければならない。ダリット・イデオロギーは、必然的に、情熱的な性質をもち、学識や読み書き能力のせいで生じた犠牲ということを反映しなければならない。ダリットはまた、抑圧者を無知や偏見から解放することに努めなければならない。

共通のダリット・イデオロギーは、すべてのダリットがカーストやサブカーストや宗教的相違にかかわらず一緒に立つことができ、彼らの立場を明らかにできる「人間の綱領」を求めるべく、宗教やすべてのセクツの利害を超越しなければならない。イデオロギーは、我々が従属から脱するのを助けなければならない、そしてこのようなものとして、それは政治的であるだけにとどまってはならない。それはまた、宗教的、文化的でもなければならない。それは土地とその富に対するわれわれの関係を明らかにしなければならない。定式化は、地域的関係をも反映しなければならない、全国的関係に限定されてはならない。

ダリット・イデオロギーは、従属や抑圧が永続化されてきた方法に本気で取り組まなければならない。それは、すべての隷属的要因に抵抗するようダリットを動機づけなければならない。

この目的のために提案されるのは以下の通りである。

一、ダリットの歴史、文化、言語、宗教、芸術、民俗、民俗環境などのすべての局面について研究と調査が徹底的に取り入れられるべきである。

二、このような研究と調査で発見されたものは、著述や他のプリントや電子メディア、協議セミナーなどをつうじて、活動家やインテリと同様にダリットの人々に分かちもたれるべきである。

三、さまざまなサブカーストのダリットや部族と一緒にするために行動プログラムを企画すること、また、相互の理解、評価、受容そして社会再建のための共同行動に向けての機会を提供すること。

四、実行方法を計画し、本協議会でなされた決議を遂行するために、一九九六年の前半期にデリーでより大きな協議会を開くこと、本協議会に関しては、その詳細は一九九五年一〇月の全国活動委員会の次の会議の後に役員たちによって計画されるであろう。

プログラム優先ナンバー・スリー

ダリット・先住民全国協議会報告

(一九九五年三月二八日—三一日、ランチー)

ダリットと先住民の全国協議会は、一九九五年三月二八日—三一日、ランチー(ビハール州)でおこなわれた。それは、ダリット連帯プログラムとインド先住および部族民連合とで共同に組織されたもので、テーマは「ダリットと先住民…出会いの場」であった。

協議会は、ダリットと先住民の歴史的な連携の祝賀に始まった。大衆集会に先立つ文化プログラムが行事を盛り上げるためにおこなわれた。ランチーに隣接する村々からやってきた若き男女は、喜びのうちに踊り、チーフゲストのMr. インドゥ・ダンや他の有力者たちをステージに導いた。集まったゲストや代表者たちに演説して、Mr. バグワン・ダスは、この日は抑圧と屈辱という共通の遺産をもつ二つの人々の連携の始まりを示すもので、歴史的な日である、と言った。この会議が、忘れられた絆と関係を再発見し、打ち固めるプロセスの出発になることが希望された。Dr. ニルマル・ミンズ主教は、ランチーにやってきた代表たちを歓迎し、この第一歩がお互いに理解しあいお互いについて学ぶのに画期的な出来事となるであろうとの確信を表明した。

Dr. ラム・タヤル・ムンダは、他州からランチーへやってきた代表たちを歓迎し、この協議会はずっと早くとられるべき措置だったと言った。彼は、たとえダリットも先住民も全く別のアイデンティティを持っているとしても、その闘いは同様のものであり、同じ構造に対するものであると述べた。

Dr. ジェームズ・マッセイ師は、集会で演説して、「ダリット連帯プログラム、その歴史と活動」を紹介した。彼は、この歴史的協議会は、一九九二年にナグプールでおこなわれたダリット連帯プログラム全国大会で決定された諸優先事項の成果である、と述べた。先住民の闘いを共有すること、そして、ダリットと先住民との連帯を表明することは、ダリット連帯プログラムの四つの優先プログラムのひとつであった。彼はこの歴史的大会で確立された結びつきや関係がたえまなく強められることを希望した。

Dr. (Mrs.) インドゥ・ダンは、部族の女性たちの直面している特別の危機について語った。Dr. (Mrs.) スワルナ・ラタ・デ

ビは、ダリットの女性たちの闘いに光をあてた。

チョークナーグブルのCNI（北インド教会）主教ジェームズ・テロム師やランチャーのインドメソジスト教会県監督J.H.バスキー師も出席した。ランチャー県の農村地域からきた先住民の一座による文化的上演の後に、大衆集会は、Dr. H. アンナンドがDSPを代表して集会に感謝を表明し、Mr. ビンカス・エッカがインド先住および部族民連合（ICITP）の人々に感謝をして閉会した。感謝の祈りはジェームズ・テロム師がつとめた。

第二日目の最初の問題提起をDr. ジェームズ・マッセイ師がおこない、Dr. (Mrs.) インドゥ・ガンが司会をつとめた。Dr. マッセイは、「インドにおけるダリットの現状と問題」について語り、二つの問題が際立っている、すなわち第一はダリット・コミュニティが宗教にもとづいて政府に分割されてきた方法であり、第二は証明と数の政治の問題である、と述べた。ザッファワル（パンジャブ州）とジャリ（オリッサ州）という二つの村におけるこれら二つのケースを取り上げて、Dr. マッセイは言った。ダリットは村の外側に住み、キリスト教あるいはイスラム教への改宗は、ダリットの地位の改善よりもむしろ一層の窮乏をもたらしており、彼らはなお同じ職業を続け、同じ問題に直面していると。無学は例外であるよりもむしろ標準的なことなのである。彼らは同じ井戸から水を引くことを許されず、違った店を持っており、若いダリットの少女のレイプは普通なのである。

Dr. マッセイは、ダリット問題は人権問題だと述べた。最後にDr. マッセイは、参加者にDSPの始まりとその方法論について報告した。

活発な論議が続いた。先住民（部族）はダリットの状態にショックを表明した。会議の司会者は問題の多くはダリットの直面する問題と類似していると指摘した。共通問題への共同のアプローチは、より良い結果をもたらさだろうというのが彼女の理解だった。

第二会議で、Dr. (Mrs.) インドゥ・ガンは、「インドにおける部族の現状と諸問題」について語った。彼女は、部族は住むところだけでなく、勉強したり働いたりするところでも苦しんでいる、と指摘した。彼女は、女性の直面するセクハラはある場合には屈辱に耐えきれずに自殺に追い込むことさえあるとの学者の研究を指摘した。彼女は、就職にあたって直面する諸問題や、特に部族文化に対する非部族の批判的態度について語った。

会議の語り手に感謝を示しつつ、司会者のMr. バグワン・ダスは、この会議が、二つのコミュニティの問題の多くがいかに類似しているかについて、一層はつきりさせたことを指摘した。

次の会議では、Dr. (Mrs.) スワルナ・ラタ・デビが、論文「ダリットとアーディワシーとの共通問題の証明」を提示した。Dr. スワルナ・ラタ・デビはマディガ(ダリット)とヤナディ(部族)のケースから始めた。彼女は二つのコミュニティの文化的類似性を指摘し、それから両コミュニティの直面する問題に光をあてた。社会的差別、子供の労働、女性の搾取、伝統工芸の消滅、そして森林生産物の利用からの締め出し。彼女はこれらのコミュニティが、それによって他のコミュニティと共存することができ、そして尊厳を持った生活をおくることができるような方法が見出だされなければならないと強調した。

会議の司会者、Dr. ラム・ダヤル・ムンダは、Dr. スワルナ・ラタ・デビがまず第一にいくつかの問題を証明したことに感謝した。他の特殊な問題もまた存在した。主要な課題は、とDr. ムンダは言った。これらの問題への個々のアプローチを検討し、お互いの経験から学び、そして、いかにして我々が独自のアイデンティティを保有しかつ平等なものとして共に活動することができるかを考えることである、と。

三月三〇日木曜日、最初の問題提起は「ダリット―部族…共通のイデオロギー」であった。この問題提起で、Dr. ミンズ主教はインドにおけるダリットと部族のコミュニティはいくつかの類似性と実質的差異を持っている、我々はひとつの民として我々のルーツを追跡しなければならない、と述べた。彼はいくつかの典拠を引用して、ダリットも部族も共に、アーリア人の侵入者によって森へ追い立てられるか、あるいは、奴隷化されるかした前・アーリアンの人々であると繰り返し述べた。支配コミュニティはすべてのインド人が同じルーツを持っているといつも我々に信じさせようとするが、しかしダリットと部族のコミュニティは支配コミュニティとは異なったルーツをもっている、と彼は強調した。部族は、丘やジャングルに逃げ込んで、侵入したアーリア人の怒りを逃れ、そして純粋さを保った。ダリットは不幸にも逃げることでできず、その結果奴隷主を手本とし、商品として利用されるのを余儀なくされた。彼らは自分たちの言語や文化さえも奪われた。何千年という別々の歴史は、我々が同じルーツを持つにしても、ダリットと部族を二つの異なった民にしてきたのである。

ミンズ主教は四つの基本的な部族問題を、(a)土地、(b)森林、(c)水、そして(d)社会―文化的アイデンティティとして、カテゴリー

化した。彼が指摘したダリット問題のいくつかは、(a)ダリットのアイデンティティ、(b)人権問題、(c)ダリットの連帯、そして(d)上層社会とは異なったダリットの社会—文化的生活の展開である。

直面する明白な諸問題は以下のとおりと彼は述べる。

- (a) 社会的かつ経済的な搾取に直面していること、
- (b) 独自の民として人権のために闘うこと、
- (c) 共通のルーツを見出だすための闘い、そして
- (d) 三億人のダリットと部族が直面する権利剥脱と闘うこと。

Mr. バグワン・ダスの問題提起は「ダリット・部族の憲法上の権利と特権」についてであった。Mr. バグワン・ダスは、憲法の諸規定の定式化において適用された歴史と原理について語り、実施においては多くの不合理とその結果生じた問題がある、と指摘した。彼は多くの先住部族が存在し、指定されているものもあればそうでないものもあることを指摘した。政府はまた、時々部族を指定からはずす。彼は最近の「ゴワル」部族のケースと、平和的抗議の後五〇〇人が死に、別の五〇〇人が不明になるという結果が生じた政府による彼らの取り扱いを指摘した。

政府はまた、宗教関係の問題において矛盾した政策を追求してきた。彼は、情勢をいっそう衰退に導いた社会立法の不実施にも言及した。Mr. バグワン・ダスの説明の後に「共通問題の証明」という議題についてパネル・ディスカッションがあった。パネリストは Dr. シタ・トッポ、Dr. カルマ・オラオン、Mr. ポール・コンガリ、Mr. プリジラルで、Dr. R. D. ムンダが司会役をつとめた。採り上げられ得る問題は多いが、協議会でさまざまな場合に指摘された問題は、可能な行動計画をつくるために、小グループでさらに討論しようというコンセンサスができた。Dr. (Mrs.) インドウ・タン、アイザック・P. マン、そして Mr. バウラ・エッカの三人委員会が任命され、諸グループからのフィードバックおよび可能な行動計画草案と声明草案を受け取って、協議会を助けることになった。

声明草案は、声明委員会によって提示され、代表者たちによって承認された。協議会の声明はただちに配布することが決議された。

諸グループの諸報告からは、「インドのタリットおよび部族民共同行動評議会」の結成要求がでてきた。以下の人々が、全国活動委員会で働くために全会一致で選出された。役員たちはまた、委員会に対しさまざまな州からもっと多くの人々を新たに委員に選出する権限が与えられた。

共同議長

Dr. ニルマル・ミンズ主教（ビハール）

Mr. バグワン・ダス（ヒマチャル・プラデシュ）

副議長

Dr. ラム・ダヤル・ムンダ（ビハール）

Dr. (Mrs.) スワルナ・ラタ・デビ（アンドラ・プラデシュ）

M. アザリア師（タミール・ナドゥ）

名誉幹事長・会計責任者

Dr. ジェームズ・マッセイ師（デリー）

共同幹事

Mr. ビンカス・エッカ（ビハール）

メンバー

Dr. (Mrs.) インドゥ・タン（ビハール）

J. H. バスキー師

Fr. ベニ・エッカ師

Mr. バウラ・エッカ

Mrs. テバキ・ハンス

Mrs. スクウィダー・カウル・タージアリ（パンジャブ）

Mrs. クレシ (ハリヤナ)

Dr. K. M. カンブル (マハラシュトラ)

Mr. K. L. ラム (ゴハール)

Dr. J. H. アーナンド (ウツタル・プラデシュ)

最後に、代表者たちは、全国会議が一九九五年二月二十八日—二十九日に開かれるべきだと提案した。活動委員会はこの会議の計画のために九月・一〇月に会合するよう指示された。

協議会は、仲介者 Dr. J. H. アーナンドと Mr. ピンカス・エッカによる感謝決議で閉会した。代表者たちもまた、仲介者がなした激務に感謝を表明した。

アイザック・P. マン (師)

記録幹事

一九九五年四月三日付

ダリットおよび先住・部族民全国協議会声明

我々インドのダリットおよび先住・部族民全国協議会の参加者は、一九九五年三月二十八日—三十一日にランチーに会合し、我々の状況、我々共通の受難およびその大義を議論した。我々は、我々の社会的、文化적および経済的状况と、またひとつのグループに特殊なあるいは両グループに共通な問題をともに議論した。

我々は、リザベーション、不可触民制、宗教の自由などの憲法上の約束が、差別の故に部分的に実施されていないことをみいだした。増大する暴力行為や、その結果生ずる「上層」およびそれ故に支配的なカーストと、ダリットおよび先住・部族民との間の緊張は、関心を示すべき事柄である。我々はまた、さまざまな目的のためにおこなわれる、部族の土地や森林に対する体系的計画的な疎外に重大な関心を示すものである。これがわが民の退廃と非人間化を結果するが故にである。

我々は、我々二つのコミュニティの生存は、今や社会における我々の正当な場所を求める共同闘争での統一如何であることを確信する。このため、我々はこの場所において、まず以下に述べるプログラムを共同して取り上げることとを決議する。

一、全インドにわたって活動するダリットおよび部族民の諸組織の共同ネットワークを確立すること。

二、以下について、わが民を教育するような自覚化プログラムを企画すること。

① 我々の社会—文化的遺産

② 我々の憲法的、政治的および法的諸権利

③ また、我々人民の間に積極的な自我像を構築すること

三、数字で表された我々の強さを正確に決定するような、そしてまた、これまで確認されなかった部族とダリットの集団を確認するようなオールタナティブな調査をおこなうこと。

これを達成し、また共同行動の他の分野を決定し計画するために、我々は、ここにおいて「インドのダリットおよび先住・部族民共同行動評議会」の結成を提案する。

「統一は力である」

〔以下次号〕